International Synposium of

WHAT CAN BIG CULTURES LEARN FROM SMALL CULTURES ?

国際シンポジウム

大きな文化は小さな文化から何を学べるか？

——国際先住民族年に向けて——

HAMARIKYU ASAHI HALL

浜離宮朝日ホール（小ホール）

東　京

NOVEMBER 17, 1992

平成４年11月17日

SHIMONAKA MEMORIAL FOUNDATION

財団法人　下中記念財団

身の回りに近づいたところで、もう一度遠くに戻ります。カマリンクさんにお話いただく前に、前座の映像をご覧いただきます。それは、あまりに知られていない西シベリアの先住民族の危機的な状況の映像による証言です。パルフョーノフさんが話されるサハリン北部の問題とも、石油という問題で深く絡んでいます。西シベリアからは、自ら証言してくださる方をお招きしていませんが、資料集には、このほどエストニア共和国の大統領に就任されたレナート・メリさんの西シベリア、ハンティ文化に関するインタビューをはじめ、色々な情報や資料を載せておりますのでご参照下さい。前座の紹介がいささか長くなりますが、最後に私に、この問題に対して理解を深めるのに大いに貢献してくれたバルト諸国の映像人たちに、感謝の意を表明させて下さい。粘りづよく闘って、ついにソ連からの独立をかちとった彼らとの交流無しには、このようなシンポジウムの実現もありえなかったのですから。

アラスカの伝統エスキモー文化に関する映像記録

L・カマリング

Film Documentation of Indigenous Eskimo Culture in Alaska

Leonard KAMERLING, Alaska

本日のシンポジウムのテーマは、「大きな文化は小さな文化から何を学べるか？」です。この重要な問題を皆さんと一緒に考えるにあたって、私はアラスカの先住民についてお話したいと思います。特に、彼らの歴史、そして彼らが生きて行くための文化的な適応手段について紹介したいと思います。また、アラスカ先住民の文化と生活を20年間にわたって映像で記録しつづけてきた、私自身の経験についても話させていただきたいと思います。実際、アラスカ先住民と一緒に生活をし、仕事をしてきた年月は、私の人生に計り知れない影響を及ぼしたからです。本日のシンポジウムのテーマについて私が語るにあたっては、私のこういった経験を皆さんにお話するのが、いちばん良いのではないかと思います。

27年前にアラスカ行きの飛行機に乗ったとき、私はまだ19才でした。そのとき、私の人生に大いなる影響を及ぼす経験が始まったのです。アメリカ合衆国では、理想に燃える青年を、国内の発展途上地域に派遣しようとする計画があり、私はそれに参加したのでした。私は自らアラスカでの仕事を希望しました。それというのも、「アラスカ」という地名とその自然に引きつけられたし、「アラスカ開拓地」というというイメージが私を虜にしたからです。毛皮をまとって、イグルー（雪の家）に暮らすエスキモーに会えるのだろうか？
あるいは、ユーコン川をのどかに漕ぎわたるインディアンのカヌーが見られるだろうか？
太古以来の素朴な暮らしをつづける先住民の村を見られるだろうか？　地球上で最も無垢な世界にひたれるだろうか？　そこに行くと思っただけで、いろいろなイメージが、尽きること無く心の中に湧き続けました。

アラスカ州カシグルック（Kasigluk）という、クスコクィム（Kuskoquim）川流域にある小さな村を初めて見たのは飛行機の上からでした。30分あまり何も無いツンドラの上を飛んだと思うと、いきなり眼下に村が現れました。飛行機が着陸のために旋回している間に見えてきたのは、村の端から端までを貫く板敷きの道と、それに沿って建ち並ぶ20軒ほどの木造家屋でした。近代的な学校やその他の大きな建物も見えました。それらの建物の裏側には、大きな燃料タンクが備え付けてありました。これが、私が、その翌年まで過ごすことになった村の姿だったのです。

この村を見た第一印象は、かなり私を戸惑わせるのでした。すべてが、私の期待というか予測とは、まったく違ったからです。私が御厄介になったエスキモーの家の主人は毛皮を着ていなかったし、彼らの家は雪で作られてはいなかったのです。この近代的な村に住む人々は、すべての点で私が映画や本を通して知っていたエスキモーのイメージとは、かなり異なっていました。なぜ、何のせいで、彼らに対する誤ったイメージや期待を抱くことになってしまったのでしょうか？　なぜ従来のイメージは、私が現実にふれている真実の彼らの姿からあまりにかけ離れたものだったのでしょうか？

小さな頃から、極北の地でかろうじて生き残っている、毛皮をまとった人々の話を聞かされてきました。本や映画の中に出てくる写真によって作られた古典的なエスキモーのイメージは、雪の家を使って移動生活をし、アザラシを獲って生きているといったものでした。私たちはよく、北極の探検物語を読みましたが、そこでは長くきびしい冬を優れた技術と機知を持って乗り越える、勇敢なエスキモーの家族が描かれていたものでした。そういった物語のなかで、今でも鮮やかに心に残っているのは、エスキモーの夫婦の姿でした。アザラシ油のランプの灯のもとで子供をあやして微笑んでいる様子や、セイウチの皮で作ったカヤック（１～２人乗りの手漕ぎボート）の舳先で幸せそうに寄り添う情景が印象的でした。

初めてアラスカに旅立つ数週間前に、私は「無垢なる野蛮人」（The Savage Innocents）というタイトルの映画を見ました。当時、たいへん人気のあった有名な映画です。タイトルそのものが、この映画の伝えるステレオタイプの文化観を示しています。この映画の主演は、あの有名なギリシャ系アメリカ人男優のアンソニー・クインでした。彼の役は、雪の家に住むエスキモーのリーダーでした。クインは、自然の猛威に屈しない、無邪気で勇敢な役柄を演じました。この映画は、教会の神父がエスキモーの無邪気な価値観を変えようとする設定になっています。神父には悪意がありませんが、結果として彼の持ち込んだ「文明」がエスキモーの人々に戸惑いと混乱を招く結果に終わってしまいます。ついでながら、この映画では主役以外のエスキモーの役は、すべて日本人俳優が演じています。この映画は興業的に大成功でしたし、それ以前の映画と同様に、「純粋で、勇敢で、無垢」という、よくありがちな先住民のイメージを助長する役割をはたしました。こういったステレオタイプのイメージは、何を根拠にして作られ、どうやって私たちの北極の人々に対する視点となってしまったのでしょうか？

ヨーロッパ人として北極を探検して初めてエスキモーに会ったのは、ノース人（バイキング）だと思われます。彼らはグリーンランドのエスキモーの様子を伝えていますが、そこでは、動物の毛皮をまとって生肉をむさぼり喰う、実に奇妙な人種について語られています。（Oswalt 1979:32）。

今日私たちがいだいている、「雪の家に住む移動民」というエスキモーのイメージは、カナダ東部の高緯度地域のエスキモーに当てはまるだけです。この地域の先住民は、大西洋から太平洋に抜けるための航路を捜し求めたヨーロッパ人と遭遇しました。彼らが報告

した「雪の家に住む奇妙な人々の姿」は、ただちに強烈なイメージとして、一般民衆の頭の中に強くやきついてしまいました。こういった19世紀のエスキモーのイメージが、今日まで残っています。

> 「毛皮のパーカを着て雪の家に住んでいる移動民」は、エスキモー全体の一般的イメージとされています。しかし、そのようにして暮らしていた人々は、19世紀に北極に住んでいた約５万人の住民のうちの５％以下に過ぎません…（中略）…
>
> 実際には、エスキモーの人々は極北圏から亜極北圏にかけての多様な環境に居住しています。彼らは世界で最も広範囲に拡散している先住民です。アザラシや北極熊だけでなく、海凄哺乳類・魚などの野生動物、あるいはベリー類などの植物をそれぞれの季節ごとに使い分けています（Fienup-Riordan 1990）。

エスキモーの家の様々なバラエティーを見れば、彼らが多様な自然環境にまたがっていることがわかります。エスキモーは、極北圏から亜極北圏の広大な地域に住んでおり、場所によって彼らの家の形もさまざまです。丸太小屋があるかと思えば、コンクリート製の住宅やツーバイフォー工法の木造家屋もあります。あるいは、トウヒやモミの木の柱をたて、芝土の屋根で覆った昔ながらの家もときおり見られます。

今日、文化に関する誤った概念やステレオタイプのイメージが作り出されるときに、最も活躍するものの一つが、いわゆる大衆メディアです。特定の映画やテレビ番組が、一般大衆の文化的概念の形成に大きな影響を与えてしまいます。エスキモーの人々に関するアメリカの商業映画の多くは、1930年代と1940年代に制作されましたが、依然として一世紀前にヨーロッパ人やアメリカ人の探検家によってもたらされた「神話」を引きずっていました。これらの映画のなかでエスキモーの人々は、誰もが純粋で無垢な人として描かれています。しかし、あくまで、道徳的には近代のヨーロッパ人よりは劣るものとして表されていることも事実です。

> かの有名な「北のナノック」（Nanook of North）という映画は、1922年にロバート・フラハティー（Robert Flaherty）によって制作されました。この映画は、自然環境の脅威と人々との闘いに焦点を当てています。「パロの結婚」（The Wedding of Palo）という映画は、デンマークの探検家であるクヌッド・ラスムッセン（Knud Rasmussen）の制作によるものですが、これは先住民自身の間における善と悪の葛藤を描いています。

史上最大の規模とうたわれるＭＧＭ制作の「エスキモー」（Eskimo）は、「自然人」と「文明」世界からの不健全な影響との相克に焦点を当てています。以上の三つの映画のどれでも、勇敢な原住民は自然の猛威には打ち勝つけれども、文明世界の悪徳の前には屈してしまうわけです。今日でもエスキモーの人々について回っている、無批判にただただ「勇敢」とされているイメージが、映画館に足を運ぶたびに植え付けられることになったのです。

これらの映画は、個性に富んだ様々なエスキモーの人々を、単一のステレオタイプのイメージで一括してしまったのです。このイメージのために、彼らの現在と歴史的な過去とは、未だに混同されたままになっています。西欧人は、他の先住民の生活様式を見るときと同じように、エスキモー文化を停滞した、発展力の無いものと見なしてしまいました。エスキモーがライフルや無線機、船外機付きボートを取り入れていることは知られているものの、そういったことは彼ら自身の純粋性の喪失としか見なされていません。16世紀の北極探検家によって植え付けられたエスキモーのロマンティックなイメージは、余りにも強烈だったために、いまだに拭い去られていません。おそらく、これくらい注目され、同時にこれくらい誤って紹介された民族は、同時代では他にないと思われます（Fienup-Riordan 1991）。

このような、文化を誤解し続けてきた歴史的背景を考えに入れれば、私が最初にアラスカに行った時に「高貴な野蛮人」に会えると思っていたことも、別に驚くほどのことではありません。でも現実には、私の期待はみるみるうちに裏切られていきました。私が社会生活の中で教えられ自分自身の中で暗黙の前提として信じていた、エスキモーの生活に関する歴史観が、誤りであったことが明らかになりました。カシガルクの社会で暮らすうちに、私には西欧人によるエスキモーのイメージと実際のエスキモーの生活の実態の間にある著しい違いが、はっきりわかってきました。こういった初期の経験の中で、私の後の仕事に密接に関わる重大な疑問が湧き出てきました。つまり、「われわれ自身の文化的な経験や価値観が、私たちが他の文化を見るときの見方にどんなふうに影響を与えたのだろうか？」、ということです。私たちが他の文化を記録しようとする時に、私たちは対象となる文化を彼ら自身が認識しているのと同じように正確に再現しているのでしょうか？　それとも、単に私たち自身の文化観を映し出しているだけなのでしょうか？

私が思うに、これまでにに作られた民族文化をとりあげたドキュメンタリー映画のほとんどは失敗作です。過去50年間に制作されたドキュメンタリーフィルムや民族誌映像では、映し出された対象である民族自体よりも、映画制作者側の文化観が重視されています。人類学の映像は、伝統的な人類学にありがちだった植民地主義的な世界観を大いに反映してきました。このようなドキュメンタリー映像を作る際に、伝統的な生活を送る人々の精神生活や彼らなりの価値観や感情の世界を理解しようとする努力が払われたことはほとんどありませんでした。また、文化的アイデンティティー（帰属意識）という複雑な問題や、

特定の文化集団の成員がいかにして自我と自分の社会的立場を認識するにいたったかというプロセスについて、あえて踏み込んで観察するということもほとんどありませんでした。

私は、こうした映像記録の歴史の反省の上に立ち、アラスカ先住民についての正しい情報の必要性を痛感して、1974年にアラスカ民族文化遺産映像記録センター（Alaska Native Heritage Film Center）を設立しました。私の頭の中には常にある疑問が渦巻いていました。つまり、先住民が彼ら自身の生活をどのように見ているのかをドキュメント映像で捉えるということが、西欧文化に属する映像制作者に出来るのだろうかということです。どうやったら自分自身の文化的な認識や偏見を越えてものが見られるようになるのでしょうか？　センターを設立して20年たった今でも、われわれは同じ問いを繰り返しています。ただし、私自身はある程度の進展があったと思っています。

アラスカで映像記録の仕事を始めたとき、私達は新しい記録方法を用いることにしました。つまり、制作者側の文化的偏見が入ってしまうことをあらかじめ考慮に入れること、そして逆に、対象である文化集団自体の自発的な意志を反映させることでした。こうした試みの結果として、我々が「地域社会との共同作業による映像制作」と呼ぶ方法が発達しました。この方法の重要な点は、映像の対象である民族自身が映画の内容を決定する役割を果たすということです。映像の構成や重点、そして文化観を決定するのは、すべての出演者の役目になっています。この共同的な意志決定のやり方は、従来のやり方における映像制作者と映像対象の役割を一変させました。つまり、映像対象と映像制作者との間に一種の相互依存関係が生まれ、両者の間の区別が厳密でなくなってきたのです。

この相互関係の成立によって、地域社会の奥深いところまで映し出せるようになりましたし、映像を見る人々に本当の民族文化を覗いてもらうことにもなったのです。地域社会との共同制作映像はもう一つの大きな効果をもたらしました。それは、先住民が彼らの文化の重要性や、地域において彼らが直面している課題を、西欧人の観衆に直接訴えかけることが可能になったことです。これは同時に、彼らの地域共同体の躍動やきめの細かい構造を示すことにもなりました。この制作法は、私が制作した12本のドキュメンタリーフィルムのすべての構造上、また倫理上の核となっています。

ではこれから、アラスカ北西部のエスキモーの小さな地域共同体と一緒に制作した映像の抜粋をお目にかけましょう。映画の題名は、「最初の移住者」（From the First People）です。この映像はシュングナック（Shungnak）という、コブク（Kobuk）川流域にある村に住むイヌピアック・エスキモー（Inupiaq Eskimo）と呼ばれる人々を映したものです。彼らは伝統的な要素と近代的な要素を調和させて暮らしています。この映像の抜粋では、ジョージ・クリーブランド（George Cleveland）という人とその妻のソフィー（Sophie）が、自分の家で、彼ら自身の生活が変化したことについて語っています。

「最初の移住者」（From the First People）の抜粋の映写。
（映写時間；16分26秒）

「最初の移住者」は1970年代に作られました。この映像の中で、ジョージとソフィー・クリーブランドの夫妻は、遠い昔の「最初の移住者」という彼らの祖先を大いに讃えています。

「最初の移住者」とはどんな人々で、どこから来たのでしょうか？　現代のエスキモー文化を理解するためには、まず、ジョージ・クリーブランドがこの映画の中で「最初の移住者」と呼んでいる、およそ 11,500年前の時代までさかのぼる必要があるでしょう。

地質学上、そして考古学上の証拠によれば、遙か昔のアラスカは今とは相当違っていたようです。当時は人間がいませんでした。現在では絶滅している動物が、森林やツンドラや山脈の中をのし歩いていました。当時は、南北アメリカ大陸には人間がまったく住んでいなかったのです。

地質学上の資料によれば、アラスカは必ずしもいつでも寒かったわけではないことも明らかになっています。いくつかの巨大な大陸プレートが地球の上をいろいろな方向にゆっくり移動していますが、遙か昔にはそれぞれの大陸は、まだ現在の位置には届いていませんでした。ですから、大昔にはアラスカも今よりはずっと南にあって自然環境のまったく違う場所だったのです。

氷河期の間には、地球上の水分の多く陸上の氷河となって北アメリカとヨーロッパを覆い、その結果として海水面が下がりました。海水面が下がるにつれて、地球上の海洋のいたるところで、陸地が出現しました。

最終氷河期の間に、ベーリング海の中の、現在ベーリング海峡と呼ばれている細長い浅瀬に、陸地が現れました。この新しい陸地によってアラスカとシベリアがつながっており、ベーリング陸橋と呼ばれます。この陸地は氷河期の歴史の中で何度も出現したと思われます。おそらくは平坦で広大な草原だったと思われます。この陸地の出現が世界の歴史を大きく変えたのです。

シベリアとアラスカの間に広がるこの草原を最初に横切っていったのは、動物だったと思われます。そして、その後すぐに、その動物を日々の糧とするアジア人の狩猟者たちが後を追っていきました。こうやって人類がアメリカ大陸に移り住んでいきました。最初は北部に定着し、次に東へ、そして南へと拡散していきました。

ベーリング陸橋を経由した移民は何度にもわたって行われたと思われます。一説によれば、一連の移民の最後に渡った人たちがアラスカにとどまって、今日のアリュート民族と

アサバスカン語系インディアンの祖先になったと言われています。この説によれば、エスキモーは初期の段階で陸橋を渡った人々とされています。

南北両アメリカ大陸の先住民は、すべてアジア系です。彼らはすべて人種的には同じです。彼らがすべてアジア中央部の一つの民族集団に起源を持っている可能性もあります。少なくとも確実に言えることは、予断を許さない未知の環境に適応して生き残るのに十分な文化と技術を、彼らが持っていたということです。

遙か昔にシベリアから陸橋を渡ってやってきたアジア系の移民達は、アラスカ全土に定着しました。彼らは、山岳地帯に小さな村や狩猟キャンプを構えて大型動物を狩猟し、川沿いに住んでは魚を利用し、あるいは海岸沿いに住んでセイウチやアザラシや鯨を獲りました。何世紀にもわたって、住んでいる場所の自然環境に応じて、文化を発達させてきました。

今日、セント・ローレンス島にあるガンベルの村における人々の暮らしは、数千年前に彼らの祖先が確立した伝統的文化に基づいています。一方、ガンベルは最新の衛星通信システムを持つ近代的な村でもあります。ほとんどの家には、ビデオ録画装置と動力船、オフロード用の車両があります。近代的な学校があり、大学に進学する人もたくさんいます。ただし、あくまで彼らの祖先と同様に、セント・ローレンス島の住民はセイウチと鯨の猟で生計をたてています。確かに現在の彼らは、狩猟の道具として、動力船や無線機、高性能のライフルといった近代技術を取り入れています。しかし彼らの狩猟活動は依然として過去における伝統的な狩猟の存続に他ならないのです。

次に、「春の海氷の上で」（On the Spring Ice）という映画の抜粋をお見せしたいと思います。この映像は、セント・ローレンス島にあるガンベルの地域共同体とともに制作したものです。この映像には、セイウチの共同狩猟の中で伝統的な技術と近代的な技術の両方が組み合わされている様子が映し出されています。

「春の氷の上で」（On the Spring Ice）の抜粋を映写。
（映写時間22分30秒）

さて、映像の最後としては、私の最新作である「冬の太鼓」　（The Drums of Winter）の抜粋をお見せいたします。この映像は、私の同僚であるサラ・エルダーと私が、ほとんど十年近くの歳月を費やして、1989年に完成させたものです。当初は伝統的な踊りと歌の実録を作るつもりで始めたのですが、結果的には、ユピック・エスキモーの精神世界を表現した長編映画になってしまいました。ユピック・エスキモーの踊りを見ることで、彼らの歴史、社会的価値観、精神世界の一端をかいまみることが出来ます。なぜならば、彼らの踊りと歌は、そういったもののすべてを取り込んで世代から世代へと継承されてきたか

らです。

伝統的なユピック・エスキモーの踊りは、かつては彼らの精神的生活と社会的生活の核心をなしていました。それはまさに、人間自体の力と、目に見えないもう一つの世界の偉大な力との橋渡しをしていたのです。今日、多くのアラスカ先住民の村では、伝統的な踊りや儀式は忘れ去られています。100年程前からキリスト教の伝導団がアラスカ全土に行きわたっていった結果、踊りやその他の儀式を通した精霊世界の民族的な表現方法は、キリスト教の教義と合い容れないものとして圧迫を受け、次第に廃止されていきました。しかし、いくつかのユピック・エスキモーの地域共同体では、何十年にも及ぶ西欧人の圧迫にも関わらず、伝統的な踊りが生きながらえてきました。もちろん形や意味付けに多少の変化はありましたが、彼らの伝統的な踊りはユピック・エスキモーの人々のアイデンティティーと存在を生き生きと表す方法であり続けたわけです。

「冬の太鼓」は、エモナック村の老人たちが、隣村と共同で行う儀礼的な集会のための準備をする様子を、そのまま映しています。彼らはダンスハウスで新しい歌を練習し、踊りの振り付けを考えるのです。語り部と同じように、踊り手の手振り身ぶりもその人独特のものです。

「冬の太鼓」（The Drums of the Winter）の抜粋を映写。
（映写時間；5分35秒）

終わりにあたって、「大きな文化は小さな文化から何を学べるか？」という本日のテーマに戻ってみようと思います。我々はお互いから何を学べるでしょうか？　このことを考えるとき、私はいつも学校時代に考えたことを思い出します。深い洞察力を持った一人の先生が発した大切な質問に思い当たるのです。その質問とは、「なぜ私たちは他の文化について学ぶのだろうか？」、あるいは、「他の文化の実像を知ることで何が得られるのだろうか？」といったものでした。その先生の答は、「他の文化について学んでいるとき、私たちは実は自分自身の文化を学んでいるのです」というものでした。他の文化の知識や考え方を研究することで、私たちは自分自身を深く洞察し、はっきりと見つめ直すことが出来るのです。この理由ひとつをとっても、私たちは少数民族の固有の文化の理解に専念すべきです。しかし今、「小さな文化」から学ばなければならない、止むに止まれぬ最大の理由は、私たちの住む世界が劇的にかわってきていることと深く関わります。私たちは実に重大な問題に直面しており、それを国際的に協力して解決するために、すべての国家・民族が大きな使命を担わなければならない時にきているのです。環境問題、世界経済、人権問題といった地球規模の問題は、一つの国家や一つの文化集団の中だけで解決できるものではありません。したがって、私たちはもはや、大きなものであれ小さなものであれ、また少数派であろうが多数派であろうが、ともかく他の文化が教えてくれることに耳を傾けないわけにはいかなくなってきているのです。このことは我々が国家として、あるいは

文化集団として、そして人間として生き残って行くために欠かすことの出来ない視点ではないでしょうか？　私にはそうとしか思えないのです。

翻訳；　熊崎　保

レオナルド・カマリング氏紹介

ニューヨーク出身のユダヤ系アメリカ人記録映像作家。彼の出身もまた、「大きな文化」に同化を拒んだ少数派の歴史を背負っている。１９世紀末の東欧のユダヤ系は、ロシア語の「ポグロム」という言葉に現わされる暴力的な迫害に苦しんだ。たびかさなる迫害に耐えきれず、多くのユダヤ人は故郷をすて、新大陸へ移住する道を選んだ。氏の父方の父祖は、白ロシア（ベラルーシ）から、母方の父祖はルーマニアからアメリカに渡ったという。１９６０年代にロンドンで映画製作を学んでから、アラスカでユピック・エスキモー文化の記録にあたった貴重な経験は、本シンポジウム講演に詳しく述べられているが、記録者と被記録者の関係を明確に規定していった氏らの記録法は、注目に値する。映画の出現からまもなく百周年。これはまた、近代的な動く映像によって、先住民族の文化を記録に残す百年でもあった訳であるが、ごくごく近年まで、記録に残す意義は多く語られても、記録される側の問題を深く掘り下げた検討は、あまりに手薄であったと言わざるをえない。その点で、氏が同僚の女性映像作家、サラ・エルダーと２０年間にわたって確立してきた先住民族のコミュニティーと徹底的に討論を何度もくり返して、撮影内容を決め、編集し、さらに、英語版と先住民族自身の言葉の２語版を、映像作家とコミュニティーの共同作業として完成するやり方は、今日的で、かつ誠実な視覚人類学的映像製作の先駆的な実例として高く評価される。もちろん、このような製作法は、金も時間も驚くほど要求される。氏らは、最新作である「冬の太鼓（１９８９）」の仕上げに、資金難や、さまざまな障害からおよそ１０年を費やさざるをえなかった。その間に８０年代から、氏は奨学金を得て、数度にわたって来日され、１９９０～９１年には、アラスカ大学博物館と北海道教育大学の共同プロジェクトで、北海道南富良野町金山小学校の僻地複式教室を通じて見た日本文化の記録に取り組んだ。氏の講演内容は、協議の結果ユピック文化の記録の問題に絞りこむことになったが、氏がどのような眼で日本の地方文化を捉えられたのか、深い興味と大きな期待で待ちのぞんでいる。

カマリング氏の作品で、当ＥＣ日本アーカイブズで参照可能な作品は、下記の通り。はじめの３作品は、日本語のスーパーが入っている。

N098
077A　At the Time of Whaling
38min.　1974　ANHFP Fairbanks　U.S.A.　Yupik
《捕鯨の時》　英語・ユピック語（日本語スーパー）
セント・ローレンス島ユピック・エスキモーの捕鯨

N099
077B　On the Spring Ice
45min.　1976　ANHFP　U.S.A.　　Yupik
《春の氷の上で》　英語・ユピック語（日本語スーパー）
セント・ローレンス島ユピック・エスキモーの春のセイウチ猟

N100
078　From the First People
45min.　1977　ANHFP　U.S.A.
《最初の人々》　英語・ユピック語（日本語スーパー）
ユピック・エスキモーの河での漁労など

N101
079　Uksuum Cauyai　The Drums of Winter
90min.　1989　ANHFP　U.S.A.　　Yupik
《冬の太鼓》　英語・ユピック語（英語スーパー）
アラスカ西海岸のユピック・エスキモーの冬の芸能・社会生活

北方の雪はまばゆいばかりに白く、まるで嘘が無い暮らしのようだとエヴェンキの古老は言う

V・パルフョーノフ

Snow in the North, it is dazzlingly white, like a life without lie - said elders of Evenk...

Vasily PARFENOV, Alma-Ata

「見てごらん、ほら、山が白く見えるだろう。あそこに昔、ユカギールの大きな宿営地があったんだ」と、老人が語り掛けました。ハクガンが上を飛ぶと、焚火の煙がかかって、煤で黒ずんでしまったもんだ。いったいどれだけの仮小屋があったことか... ところがその後、まるで恐ろしい疫病神がやってきて人間をなぎ倒していったようになってしまった。一人も生き残ったものはいなかった」。老人は祖先の記憶を辿っている様子で、頭を垂れて立ちつくしていました。穏やかで、聡明な老人の顔が夕日に照らされていました。彼の右手には、広大な山々がオホーツク海まで伸びており、前方には雪に覆われた無毛のツンドラが北極海まで広がっています。

わが惑星において、雪というものは、自分自身の水分が蒸発して発生するものです。それは不滅で、星雲の中のどこにでも存在しています。宇宙空間の中では雪の結晶が果てしなく広がった雲が、場所を変えては永遠に流れているのです。雪、それは一瞬の間、窓がまちの上に積もる薄い雪片の結晶です。けれども雪はまた、太陽系への道を示す道しるべでもあるのです。火星も、われわれの地球も、太陽の光を反射することによって、われわれの太陽系に関する信号を遠くの世界へ送っています。遠くの星へ向けて出発する宇宙飛行士にとっては、彼が別れを告げる、故郷の最後の相手は、恐らく雪でしょう。そして雪は、われわれのところへ飛んで来る異星人に対し、その煌めきによって、われわれの国へ到達する道を示していることでしょう。

地球上では南の南極、北の北極では、雪は最高の支配者タイタンなのです。恐らく、われわれの地球上において寒冷化は近いことでしょう。そのとき、われわれはどうするのでしょうか？　雪がわれわれを魅了することはなくなるのでしょうか？　しかし、もしそのような時代が訪れたときに、地球上に残りうるのは、ふんわりと白い羽毛の絶えざる落下におびえることのなかった人たちです。彼らこそ本当の「雪の人」たちです。雪の人たちは北極点を取り巻いています。アリュート、エスキモー、インディアン、グリーンランド、ロパーリ、ネネツ、チュクチャ、ヤクート、ユカギル、コリャーク、ニヴフ、オロチの人々です。